

主体的小説読解の取り組み — 『ころ』の構造分析を通して—

要旨

二年生現代文Bにおいて、「実技」としてのコミュニケーションカの実践的な養成を年間目標とした。そして11月に実施した『ころ』の授業において、それまでに獲得した力を発表の形式で評価すると共に、生徒による自身の変化の気づきが期待される実践をおこなった。生徒たちには多くの成長が見られたが、協働学習という形態の内包する課題も継続していることが明らかとなった。実施した授業の構造自体はそのままに、より生徒たちの主体性を高める授業構築のために、テキストマイニングなどによる精緻な分析の可能性がまだ残されている。

背景／課題

国語、特に現代文は生徒の自主課題への低い取り組み姿勢など、主体的に取り組みにくい教科である。生徒が日常的な言語活動に不自由を感じないことが要因の一つである一方、実際は相互の意見交換に正確性を欠いており、かつその自覚もないという課題がある。

二次実施の現代文Bでは言語活動を「実技」として改めて認識し、「社会と繋がり明日を切り拓く資質能力」たる「コミュニケーションカ」を育成することを一つの目標とし、年間計画を立てた。「コミュニケーションカ」とはここでは、

- (1)「連続・非連続テキストの意味内容の正確な《読解技術》」
- (2)「自らの理解した内容の正確な《伝達技術》」
- (3)「他者の口頭での内容説明の《受容技術》」
- (4)「異なる意見の《比較・評価技術》」

の四つに分割定義し、その包括的能力として育成を目指した。その主たる方法は年間を通じての協働学習による相互の学びである。

研究方法

協働学習の実践を継続的にを行い、11月に夏目漱石『ころ』の授業を実施した。本単元においては、次の各項目に関しての主体的な知識・技能の定着の確認と思考力の育成を目指した。

項目 a：班による各段落の読解・分析

生徒は上述の(1)「読解技術」を用いて、本文を読解する。また班で意見交換する中で(4)「比較技術」を実践する。年間を通じての協働学習の一環として、学年開始時と終了時のアンケート調査で、生徒の取り組み姿勢などどのような変化があったかを分析する。

項目 b：班による発表

生徒は(2)「伝達技術」を用いて、本文各担当段落の読解内容をクラスに説明する。伝達が適切に行えたかどうかは、全体に対する教員からの質問や内容に関するチェックテストによって確認する。

項目 c：発表に対する質疑応答・相互評価

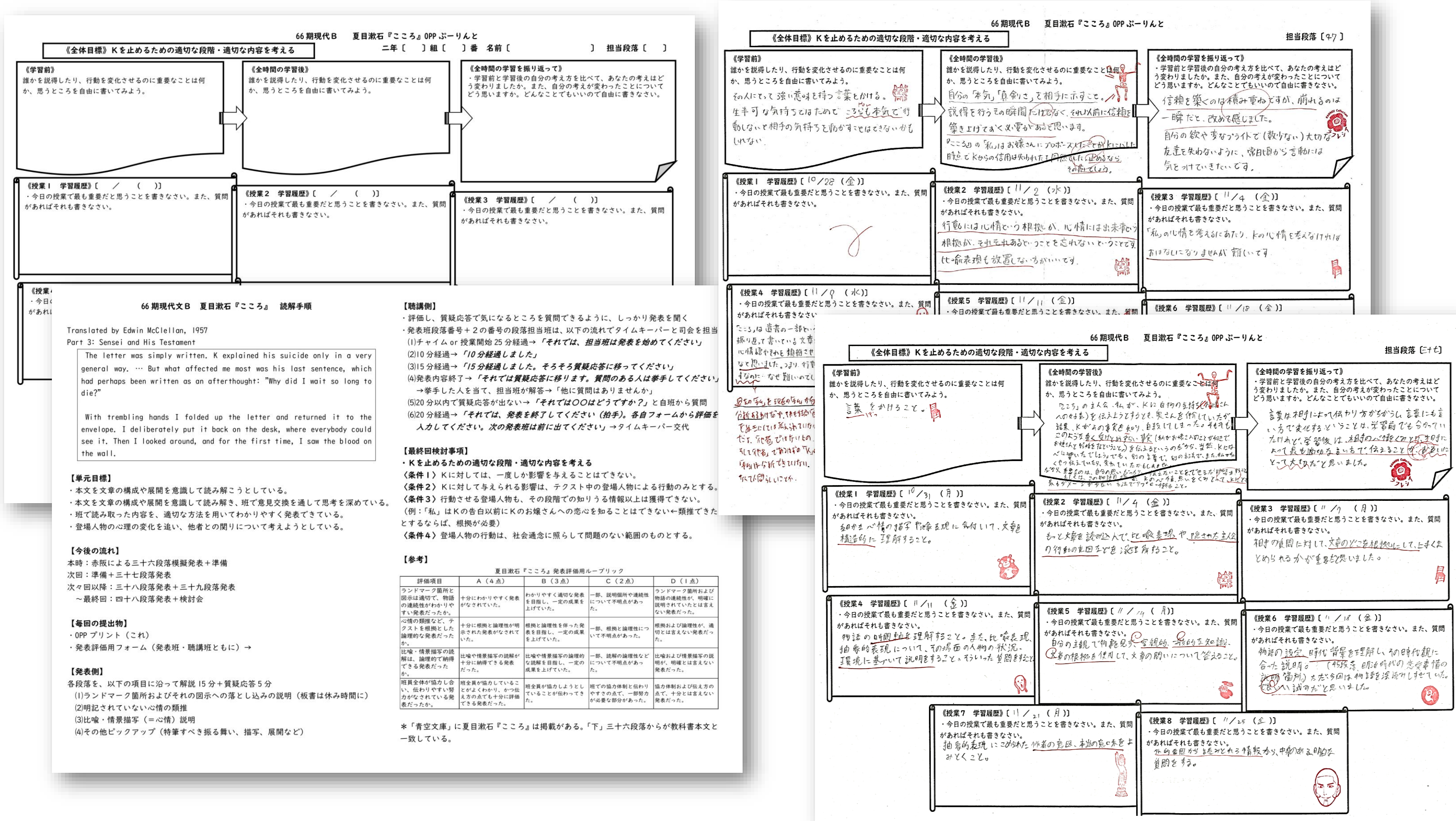
生徒は(3)「受容技術」(4)「評価技術」を用いて、発表を相互評価する。教員評価、自己評価、他者評価を行い、他己評価能力にどの程度差があるか分析する。

項目 d：自己の思考変化の気づき

OPPA（一枚ポートフォリオ評価）の方本論を取り入れ、生徒はOPPプリントに取り組み、自己の思考の変化について思索する。記述内容を後日分析する。

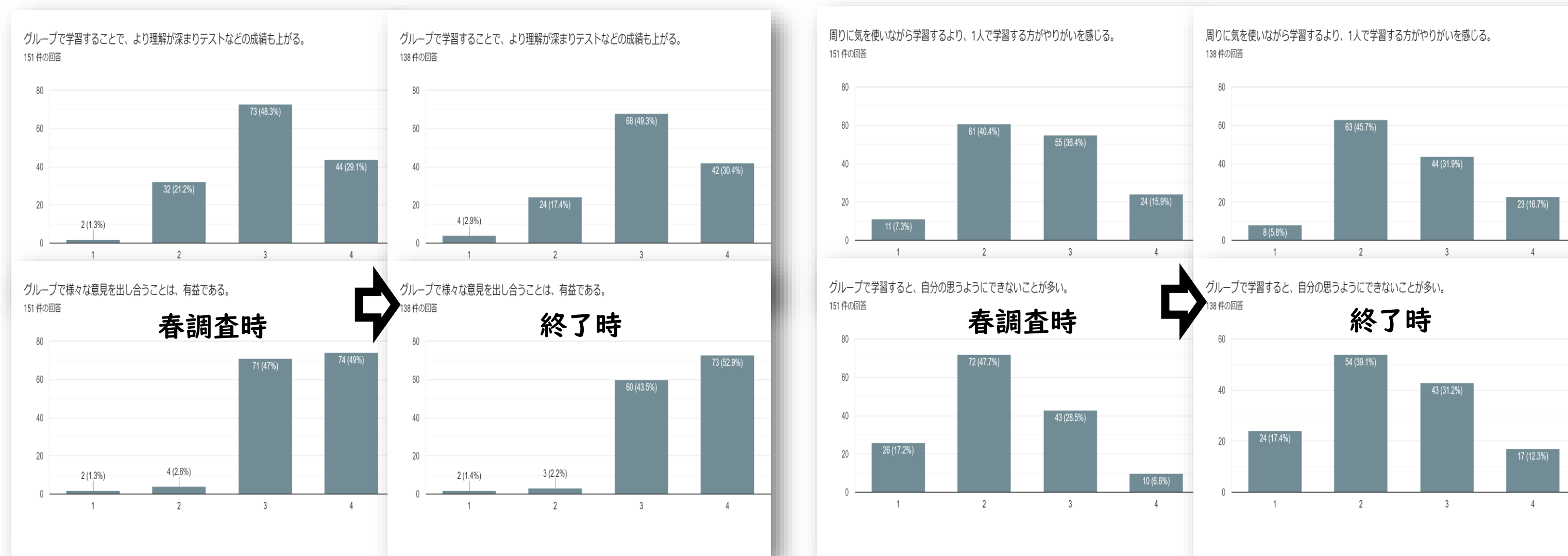
↓OPPプリント

↓OPPプリント記入例



結果／考察

項目 a：学年開始時と終了時で同一項目のアンケートを行った。グラフはその一部である。



「協働学習が自身の学びにつながる」というポジティブな評価が微増した。一方で「協働学習だと個人の学びが阻害される」というネガティブな評価も微増した。現状はバランスが取れている結果と言えるが、ネガティブな評価の増加が推測される三年次に向けて課題が残った。

項目 b, c：すでに本単元において複数回のパフォーマンス型授業の実践の後ということもあり、発表・質疑応答の内容は一定水準に達していた。根拠に基づいた発表が試みられ、一方で不正確な説明に対しては適切な質問が聴講者より出る場面が散見された。評価に関しては自己評価、ならびに教員生徒評価にはそれぞれおおよその一致が見られた。

項目 d：積極的で主体的な記述が多数見られた。その授業ごとの気づきでは、特に成長が見られた。一方で単元全体のテーマに関連する「自己の思考変化の気づき」では、期待したような成果の記述のない生徒も多く見られた。

生徒の記述例

(1)OPPプリント「自分の考えの変化」記述

- ・論理的な正当性も大切だが、誠実さといった感情論的な部分も案外大切になってくることが多いと気づいた。
- ・相手のことを考えているように見えて、実は自分のことを考えていたりする。自分の考えにとらわれないようにする必要がある。
- ・生徒だけで自分たちの意見を伝えて読み解くのが珍しく、疑問、納得できないこと、分からなかったことに関して意見が聞けて視野が広がった。
- ・小説だと冷静に判断できる。でも実際に自分が「私」の立場だと「タイミング」を上手につかめるかは分からないと感じた。
- ・発表者としてどう伝えるべきか考えるだけでなく、聴く側になることで初めてわかる伝え方が見えてきた部分があった。
- ・学習前後で特に大きく変わらないが、相手の気持ちを大切にすることが、相手の行動を変えられたと思った。

(2)協働学習アンケート記述

- ・夏目漱石の「ころ」で今までにないくらいしっかり理解できたのでとても良かったと思っています。
- ・書き言葉にしにくいものを一度話して伝えることで整理できる事があった。
- ・グループワークは実際にメリットが多く、複数の人の意見を交流させて知見が深まると思うが、実際はその通りに上手くいくには全員がコミュニケーションが上手く積極的な姿勢が必要なため、なかなか上手くいかない。
- ・グループワークで仕切る人が何をすべきかわかっていなかったら楽しくない。提言しても流されることがある。小中学でのグループワークのときに教師によってリーダーが決められていた意味がわかったような気がする。
- ・グループワークにメリットがあるのは実感できたが、一人で勉強するほうがなれているのでやりやすいです。
- ・サボる側だからグループワークは楽しい。

展望

コミュニケーションカの育成には一定の成果が出た一方、この年間授業構成での協働学習に対する意識づけの限界が明らかとなった。生徒がより知識・技能の獲得を実感できる工夫などを、生徒の記述内容をテキストマイニングするなどして、生徒の期待などを含めてより精緻に分析しながら、次年度へ、また古典分野などへもつなげていく可能性が残った。

最後に

本研究を進めるにあたり、大阪教育大学石橋紀俊教授に指導助言を頂きました。心から感謝いたします。

参考文献

堀哲夫 (2021) 『一枚ポートフォリオ評価OPPA 一枚の用紙の可能性』 東洋館出版社